

第一章 臺灣植物研究の略史

第一期 外人の採集と研究 始めて外國人によりて臺灣の植物が採集せられたのは、一八五四年でフォーツン (R. Fortune) である。氏は倫敦王立園藝協會の温室係で、四度採集の爲め支那に派遣せられた。其三回目に支那政府の備船コンフェウム號にて福州から淡水に来て、四月二十日一日の碇泊中に海岸附近の植物を採集した。一八五八年に英國キュー植物園の採集者ウィルフォード (C. Wilford) が英國運送船インフレキブルに便乗し、廈門から臺灣府に入り高雄・小琉球より鸞鑾鼻を廻り蘇澳に入り、基隆から淡水に近い艋舺に航し再び基隆に歸航し、更に北端を廻りて西海岸に出で、再度臺灣府に入り、これから澎湖島等より廈門に還る間各所上陸地で採集した。この行には廈門駐在領事スウィンホー (R. Swinhoe) も同行し多くの採集をなした。一八六四年にはウィルフォードの後任たるオルダム (R. Oldham) がスウィンホーの招待で測量船に便乗して渡臺した。氏は熱心に淡水や基隆附近を採集し、其數七百に上つたが残念な事には採集中病を得て斃れた。一八六五年に淡水駐在の英國副領事グレゴリー (W. Gregory) も淡水附近の植物を採集し、同年香港の醫師獨人シキチック (A. Schetlig) も亦臺灣に旅行の時採集した。一八七三年には米國ミシガン大學動物學教授ステーン (J. B. Steere) は本島に到り各地の採集を試みた。

此頃に英國聖公會派の宣教師カムベル (W. Campbell) は臺灣府滞在の間植物の採集をなし、特に中央山脈に於て採集し、之を大英博物館に寄贈した。又英國領事ワッタース (T. Waters) は一八八一—三年まで淡水及び基隆に於て採集した。一八八一年四月より八二年四月までハンコック (W. Hancock) が税關吏として淡水に駐在中、植物殊に羊齒類の採集をなした。同氏は採集品をキュー植物園のみでなく、露都のマキシモウヰチ (C. J. Maximowicz) にも送つた。一八八四年六月には英國香港植物園監理者フォード (C. Ford) 來臺、基隆及び淡水で數日間採集をなした。一八八八年及び八九年に互り英人プレフェア (Playfair) 臺南の領事として駐在中主として高雄の植物を採集した。これ等の人々の採集品は多くはキュー植物園に送られ、フーカー卿 (J. D. Hooker)、ホルン (A. R. Rolfe)、ランス (H. F. Hance)、ベーカー (J. G. Baker) 又はオリヴァー (D. Oliver)、ブラウン (N. E. Brown) 等が研究し、Annals of Botany, Curtis's Botanical Magazine, Journal of Botany, Hooker's Icones Plantarum, Kew Bulletin, Journal of the Linnaean Society, Gardeners' Chronicle, Bulletin de l'Herbier Boissier, Annales des Sciences Naturelles 等に續々と新種を發表し、露國のマキシモウヰチはその研究を Mélanges Biologiques に載せた。一八九三—四年にヘンリー博士 (Henry) が高雄附近の採集をなし、萬金庄及び鷺巒鼻にも採集を試みた。更に蕃人の危險を冒し本島人を使用して採集させ、山地では二千尺まで及んだ。又鷺巒鼻に於ては燈臺守シュミュレル (Schmürrer) が採集し、且頭目を使用して採集をなしたが高地に達する事が出来なかつた。是等の採集品を基礎として一八九六年日本亞細亞會誌上に「臺灣植物目錄」を公にした。其中に一四二六種を記載し、其中一四六種は羊齒植物である。同年ヘルキンの臺灣に關する報告中、其附録としてヘン

リーの臺灣植物に關する通俗な記事が載せてあり、これがキュー報告に轉載されて居る。又一八八六—一九〇三年に互るフォルベール (B. Forbes)、ヘムズレー (W. B. Hemsley) 兩氏の支那植物目録にも從來知られて居つた臺灣の顯花植物が全部載せられて居る。これが第一期で主として英國人により採集され英國の植物學者により研究されたものである。

第二期 領臺後、臺北帝國大學設立まで 領臺後東京帝國大學は一八九六年に牧野富太郎及び大渡忠太郎兩氏、一八九七年より八年に互り大渡忠太郎氏、一八九九年より一九〇〇年に互り三宅驥一氏等を採集の爲め本島に送り、其採集品は現に東京帝國大學理學部植物學教室腊葉室にある。田代安定氏・本田氏・川上氏・長澤氏・河合氏・佐竹氏・上野氏・横山氏・矢野氏等は當時植物を採集した。是等の材料を故松村任三博士が研究し、其當時の植物學雜誌に發表せられて居る。其後早田文藏博士が主として研究に従つた。又一九〇四年に臺灣總督府内に有用植物調査と云ふ名義で、川上瀧彌氏が主任となり、島内に於て中原氏・島田氏・森氏・佐々木氏等が熱心に採集に従事し、一方早田氏は總督府の囑託となり東京帝國大學に居つて研究された。一九〇五年には其時までの材料を基として松村任三・早田文藏兩氏の合著にて『臺灣植物誌』が東京帝國大學理學部の紀要として出た、それまでの調査區域は主として平地で、高地は蕃人の爲め入ることが出来ず調査は殆ど三千尺位までの間に限られて居た。然るに一九〇五年には川上瀧彌・長澤定一・中原源治氏の一行新高主山を極め、翌年の十月にも亦川上瀧彌・森丑之助の兩氏再度の登山に成功した。森丑之助氏は臺東山地の調査をなす等山地の植物の材料が相當集つて來た。その結果一九〇八年には早田氏の『臺灣高地植物誌』の著が東京帝國大學理學部の紀要として出た。續いて小西成章氏の「タイワニア」の如き珍らし



き種類の發見となり、益々材料が多くなり早田氏は等を携へて渡歐し外國のタイプと比較研究し、一九一一年に早田氏の『臺灣植物誌資料』が東京帝國大學理學部の紀要として出版せられた。又同年臺灣總督府より早田氏の筆になる『臺灣植物誌』第一巻出で、後毎年一卷づゝ一九二一年に至るまで十巻が出て完結した。川上瀧彌氏の『臺灣植物目錄』（一九一〇年）・金平亮三博士の『臺灣樹木誌』（一九一七年）・山本由松氏の『續臺灣植物圖譜』四冊（一九二一—一八八）・佐々木舜一氏の『臺灣植物名彙』（一九二八年）及び『林業部腊葉館目錄』（一九三〇年）等も亦是等の調査の賜である。外人ではプライス (Price) やバートレット (H. H. Bartlett) の採集があつたが、其採集品の研究が未だ十分に學界に發表されて居ない。

第三期 臺北帝國大學設立以後 昭和三年三月臺北帝國大學開設され、植物分類學が植物學第一講座として設けられた。これまでは本邦の帝國大學で分類學が講座として設けられてあつたのは東京帝國大學のみであつた。臺北帝國大學理學部植物學第一講座に於ては手近の臺灣の植物界の研究が主となり、自然臺灣植物調査にも手をつける事となり、Contributions from the Herbarium of Taihoku Imperial University を出し、正に六冊に及んで居り、地方の精密なる植物調査を始めて居る。即ち余は恒春半島地方を、正宗巖敬氏は各地の高山一萬尺以上の部分を、山本由松氏は臺東山脈を、鈴木重良氏は太平山をそれぞれ手分けして調査して居る。是等の仕事が普く行き渡る時は即ち立派な臺灣植物誌が出来る時である。

第二章 植物地理學より見たる臺灣植物

グリーゼバッハ (H. Grisebach) の『地球の植被』第二版 (一八八四年) には臺灣は「支那日本地方」に入つて居る。ドルーデ (O. Drude) の『地球の植物區系』(一八八四年) には臺灣は「印度・南洋・濠洲區系」に入つて居る。又ヘンゲレル (A. Engler) の『植物界發達史研究』(一八七九年) には「東亞熱帶地方」に入れられ、馬來地方に屬する比律賓とは別な地方となつて居る。一九一〇年クリスト (H. Christ) は『羊齒地理學』に於て臺灣を「馬來區系」に入れて居る。馬來區系とは印度の大部分・馬來半島・馬來群島・北部濠洲・南洋諸島を含む地方即ち熱帶で臺灣は熱帶の北限であると云ふのである。舊日本と臺灣につき早田氏は『臺灣松柏科植物の分布に就て』(一九〇五年) に於て臺灣植物と日本植物との關係の密なる事を論じ、臺灣と日本との間に連續した陸地があつたとして其相同の原因を説明して居る。更に同氏は一九一〇年第三回萬國植物學會に於て日本植物と臺灣植物との密接なる關係を高唱し、當時の調査を基礎として固有種一七%、日本要素三四%、北支那要素九%、中央支那要素二八%、南支那要素三四%、ヒマラヤ要素七%、印度平原要素二五%、馬來要素二六%、濠洲要素五%であると述べて居る。之に對して反對の意見を出したのは米國ハーバード大學のウィルソン (E. H. Wilson) 也、一九二〇年である。臺灣が大陸島であり第三期に大陸から分離し臺灣海峽が百フィートより深くない事は一般に認められて居る。故に自然の結論としては臺灣の植物區系は支那の揚子江以南の東海岸のそれに近いと云ひたいが實際は之と異り、眞の親縁關係は中央及び南

西支那（即ち湖北省・貴州省・四川省・雲南省）である。

山毛櫸科及び樟科等の植物で同一のもがあり、「ヤどりおほぼとべら」の如きは臺灣の中央山脈とオメイ山、其附近及び四川省にあるのみ。又「いちご」屬でも前種と同じ分布状態で東部支那にはないものがある。又「しじょうつつじ」の如き種の分布型は西限は湖北省で南西限は四川省で東は臺灣と東部支那とにある。只中部及び西部支那にあるニッサ科・オヒコミア科・「かつら」屬・「ふさざくら」屬・「ほほのき」屬・「まんさく」屬等の臺灣にないのは不思議であるが、かゝる例外を追及することなく臺灣裸子植物を見るに、「たいわんあかまつ」は寒地を除いて支那の海面の高さから一三〇〇米まで廣く分布して居り、「たかねごえふ」は中部及び西部支那に豊富であるが東部支那にはない。「にひたかたうひ」は固有種だが西部支那の *Picea Watsoniana Masters* に近く。「たいわんとがさはら」は貴州省・雲南省の *Pseudotsuga sinensis Dode* と同じもの。又「ゆさん」は中央及び西部支那の一六〇〇米以上に多い。「くやうえふさん」は共通で、「たいわんすぎ」は雲南省の北境に發見された。「せうなんぼく」は臺灣と雲南省のみに産する。「たいわんびやくしん」及び「にひたかびやくしん」は中部・西部支那にもある。「たいわんいちぬ」は同じく中部及び西部支那にある。要するに「なぎ」屬と「ひのき」屬のみは日本植物區系に關係あるがその他の殆ど全部は、他の潤葉樹と共に中部及び西部支那と關係がある。一般に云へば屬から見ると日本・琉球・臺灣・支那及びヒマラヤの溫帶區系間に明瞭なる境をつける事は不可能である。屬は多くの場合、是等の地方を通じて共通である。尤も數から云へば中部及び西部支那に集中して居る。然し種類若くは類似せる種類について云へば、各地方は植物地理學上個々の實在を示して居る。この點から見て臺灣の植物區系は日本・琉球及び支那の沿岸

地方よりも中部及び西部の植物區系に近いと云ふ結論である。

臺灣はバシー海峽を隔てて比律賓に接して居る。エンゲレルは一九一九年に臺灣・比律賓區として兩者を合同した。これに對し一九二三年多年比律賓に在りて其植物を研究して居つたメリル博士 (E. D. Merrill) は反對の意見を發表し臺灣と比律賓との區系の差を極論した。即ち臺灣にあつて比律賓になき科は敗醬科・山蘿蔔科・鹿蹄草科・岩梅科・齊墩果科・濱沈丁科及び狸菖蒲科等である。又比律賓で多數の屬及び種がある科は蕃荔枝科・棟科・金絲桃科・梧桐科・橄欖科・使君子科・桃金娘科・苦苣苔科・秋海棠科・胡椒科・赤鐵科・野牡丹科・榮蘭科及び棕櫚科等で主として熱帶的のものである。これに反して臺灣で比律賓よりよく代表せられて居る科は毛茛科・小蘗科・十字科・罌粟科・董菜科・石竹科・冬青科・衛矛科・薔薇科・虎耳草科・景天科・繖形科・忍冬科・桔梗科・龍膽科・松柏科及び百合科等で主として溫帶のものである。

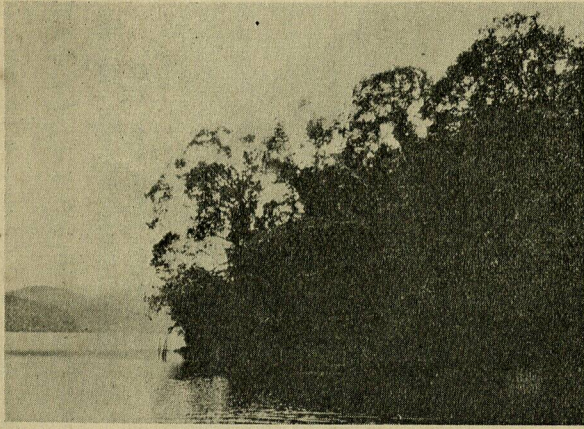
比律賓にありて臺灣になき科はトリウリタ科・セントロレヒダ科・モニミア科・猪籠草科・クノニア科・古柯科・デカペタラ科・スタクホウシア科・ゴニステラ科・オクナ科・龍腦香科・ダテスカ科・令法科・エパクリダ科・サルバドラ科及びステリデア科等である。是等は主として濠洲型のもので然も熱帶的のものである。特に注意すべき事は龍腦香科の分布状態である。此科の分布の中心はボルネオで比律賓では九屬五〇種程あつて原生林を通じて優勢である。其中の五屬 (Anisoptera, Hopea, Pentacme, Shorea, Vatica) は臺灣と呂宋の境なるバブヤン群島に及び、ここでは各屬一種づゝを有して居る。臺灣に自生する一一八五屬中二六五屬は比律賓になく、これ等は多く大陸型又は溫帶型のものである。又比律賓にある野生の一三〇八屬中六六〇屬は臺灣にない。臺灣と比律賓に限らるゝ屬は一つ

もない。兩者共通の種類(約四〇種)も亦多くない。然も是等は種子が風や鳥によつて運ばれ得る可能性あるものが多い。其分布も比律賓全部に互るのではなく中部呂宋の北部に多い。又日本又は琉球より支那・臺灣・比律賓に互りて分布するものも、多くは中部呂宋以北に限られ、中位より上位の山地に生育する。臺灣及び呂宋に分布するヒマラヤ型の植物はヒマラヤ植物區系の最南端を示すもので、其中多くは臺灣が亞細亞大陸に連結せし時に渡りしもので、これからバンシー海峽を経て呂宋に達したものと思はれる。バンシー海峽形成以前即ち第三期の初めである。

濠洲型の植物は比律賓によく發達し、多くは呂宋北部まで達する。即ち *Calogyne*, *Styidium*, *Centrolepis*, *Eucalyptus*, *Stackhousia*, *Microlaena*, *Cladium*, *Pleiogynium*, *Phrygilanthus*, *Quintinia*, *Xanthostemon*, *Osbornia*, *Camplostemon*, *Paterosonia*, *Didiscus* 等は其代表的の屬で各、野生種がある。しかるに臺灣に於ける濠洲型は極めて少く、*Halorrhagis*・想思樹(臺灣及び呂宋)及び「かはりばあさがほ」(臺灣・北部呂宋・北部濠洲)等である。たゞ不思議なのは「いしださう」屬は臺灣に一種・ボルネオに一種・濠洲・ニューギラン・ド・南米に數種あるが比律賓になく、又「はまぢんちやう」屬は濠洲型のもので、臺灣に一種あるが比律賓にない。比律賓にあるパプア・セレベス・モルッカ型は臺灣にない。以上の事實より見るに、臺灣と呂宋との間の分離は他の比律賓が南方の諸島と連結した時代にあつたもので、ブライオシオン及びブライストシオンには既に存在したものと思はれる。臺灣になき龍腦香料はブライオシオンには呂宋に優勢であつたからである。臺灣にある馬來型の植物は臺灣が大陸の一部であつた時代に印度支那又は南部支那を通じて渡來したものである。従つて臺灣と比律賓は其位置が近くに拘らず植物地理學上別々のものとせなければならぬと云ふのである。其後エングレルは訂正を加へ、比律賓

とは全く異なる區 (Provinz) とし、臺灣の下部 (平地・低い山地) を貿易風地方熱帶臺灣區に、上部 (高地) を東亞の亞熱帶・南溫帶轉移地方に入れて居る。余は寧ろ前記兩者を區 (Provinz) とし溫帶亞細亞地方 (Temperierte Ostarien [Gebiet]) に入れた方がよいと思考する。

第一圖 中南部小區の常綠潤葉樹林、
臺中州日月潭湖畔



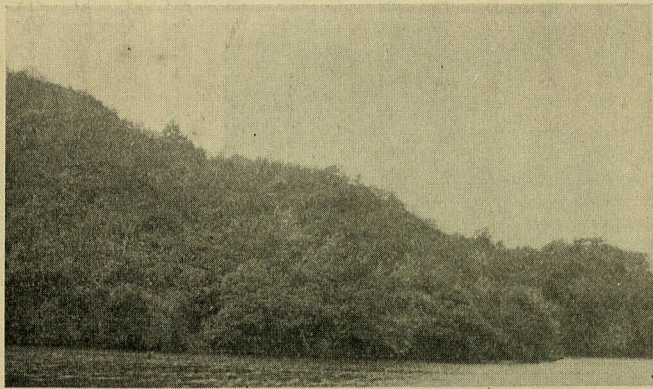
第三章 エングレルの貿易風地方・熱帶 臺灣區の區分

此區は更に六つの小區に分たれる。北部小區・中南部小區・恆春小區・東部小區・紅頭嶼・火燒島小區及び澎湖島小區である。北部小區は大體に於て臺灣及び新竹兩州管内で、大分北方の要素が入つて居る。この小區にあつて他にない種類の例を擧ぐると「ぜにごけしだ」・「はんこくしだ」・「たうゑんゐ」・「ほくとくまたけらん」・「まつだえびね」・「ふしなしおさらん」・「たいわんぶなのき」・「なかいがし」・「やまもがし」・「じゅんさい」・「ばいくわわうれん」・「はまだいこん」・「ながばのいしもちさう」・「いしもちさう」・「たいわんくろづる」・「ごんずゐ」・「たいわんたうかへで」・「かくばんひとつばたご」・「き

臺灣の植物

いるんをどりこさう」・「うらいをどりこさう」・「にしきはりなすび」・「やへむぐら」・「やへやまいなもり」・「こばなすびかづら」・「たいわんすずめうり」等がある。熱帯果樹でよく實を結ばないものもある。中南部小區は大體に於て

第二圖 恒春小區、湖岸の常緑闊葉樹林、牡丹灣附近 (原圖)



第三圖 恒春小區、河口の植物相、恒春半島阿塹衛 (原圖)



臺中州・臺南州及び恒春半島を除く高雄州管内で北部小區で成績のよくない熱帯果樹がよく生育して居る。この小區にあつて他に見出されない植物は「つるあみしだ」・「くりはらん」・「へんりーいも」・「すゐしゃやなぎ」・「はりじひのき」・「なんとうがし」・「ながみぐす」・「ながはまんさく」・「たかをてんつき」・「たいわんはまはぎ」等が其一例である。恒

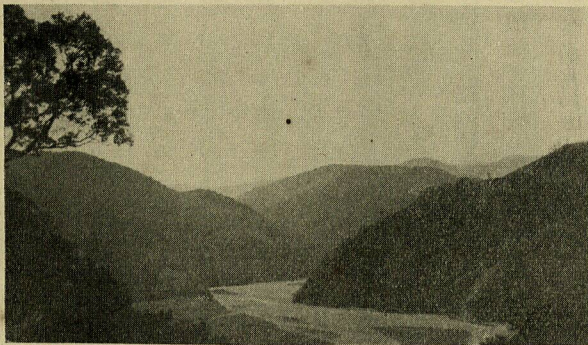
春小區は恒春半島で東部小區に最も近い關係を有し、又中南部小區の南端に於て相接して居り、特に固有種が多く着生蘭がよく發達して特別の

小區を形成して居る。この小區にのみ限らるゝものの例を擧ぐると「くすくすやりはらん」・「こうしゅんくらまごけ」・「かんかてんつき」・「くすくすらん」・「くすくすせきこく」・「くすくすさがらん」・「へらきのへらん」・「くすくすふうらん」・「こうしゅんやまも」・「ひらみがし」・「もんばがし」・「こばのなんばんがし」・「こうしゅんいぬびは」・「がらんびぼたんづる」・「たまごはくすのき」・「こうしゅんもだま」・「くらるがき」・「たいわんふくぎ」・「くすくすあでく」・「こうしゅんくちなし」等がある。東部小區は臺東・花蓮港兩廳管内で、この小區に限らるゝ植物は「いはひばもどき」・「たいわんそてつ」・「たいわんうらじろいぬがや」・「フォーリーせきこく」・「たいとうあふひらん」・「たろこがし」・「たろこしもつけ」・「たろこししうど」・「たいとうりんだう」・「もりぎく」

第四圖 東部小區の常綠潤葉樹
林の一、洞門・坂邊間、
海拔約一〇〇〇尺（原圖）



第五圖 東部小區の常綠潤葉樹
林の二、大武・姑子崙間、
海拔二〇〇〇尺（原圖）

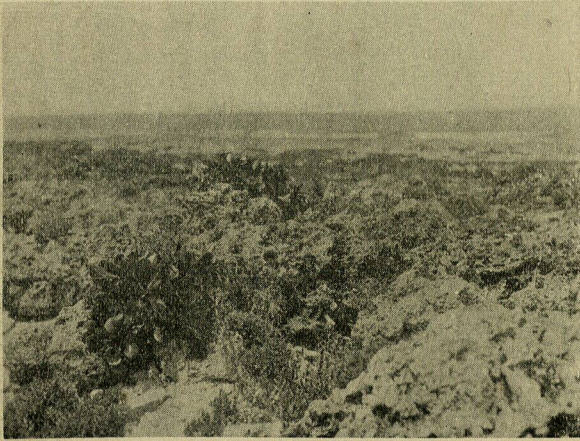


等で所々に「しろがじゆまる」の大木を見る。紅頭嶼・火燒島小區は勿論この兩島を含む。今兩島にのみ分布し、他の小區になき種は「こうとうりうびんたいい」・「あつばしのぶ」・「つばめせきこく」・「べにばなせきこく」・「きんま」・

第六圖 火燒島の植物、海濱植物景觀

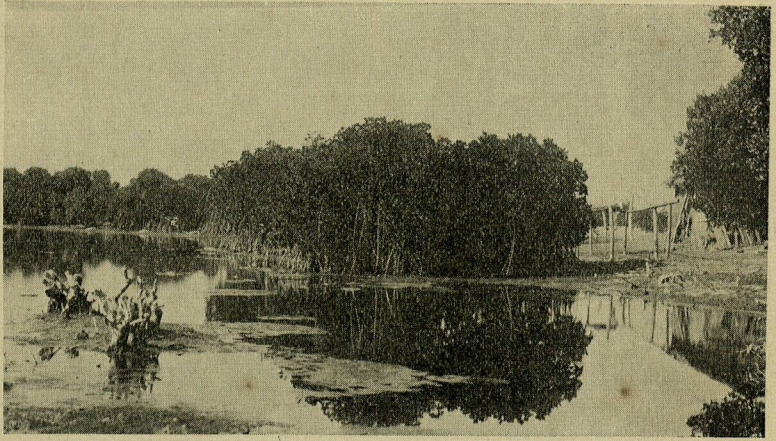
て大なる葉の植物は「くさとべら」

(原圖)



「こうとうえのき」・「くわせういぬびは」・「こうとうにくづく」・
「くわせうだも」・「きんしよくだも」・「こうとうしろだも」・「こう
とうくすまめ」・「こうとうびんぼん」・「こうとうしゅうかいどう」・
「こうとうやつで」・「こうとうたちばな」・「こうとうえこのき」・
「こうとうなたをれ」・「けさやばな」・「こうとうきなもどき」・「こ
うとうからすうり」・「こうとうすゐせんじな」等である。其他紅頭
嶼に限らるゝもの又は火燒島に限らるゝものもある。固有種の率が
極めて高い。尙、東部小區・恆春小區及び紅頭嶼火燒島小區は其關
係近く、三小區を通じて共通なる種類が可成りある。澎湖小區は
澎湖島を含むものである。其岩石が本島と異り、「びろうどかも
はし」・「ばうこやぶまめ」等の其他の小區になき様な種を含む。以
上述べた所は現在の知識によるもので、將來研究の結果、三小區即
ち北部（主として臺北・新竹兩州管内）・西部（臺中・臺南兩州及
び恆春半島以外の高雄州管内と澎湖島）・東部（花蓮港・臺東兩廳





第七圖 紅樹林、「あかばなひるぎ」の小群叢、高雄灣草蓐（原圖）

管内・恒春半島・火燒島及び紅頭嶼）に分つ様になるかも知れない。

第四章 臺灣の植物相

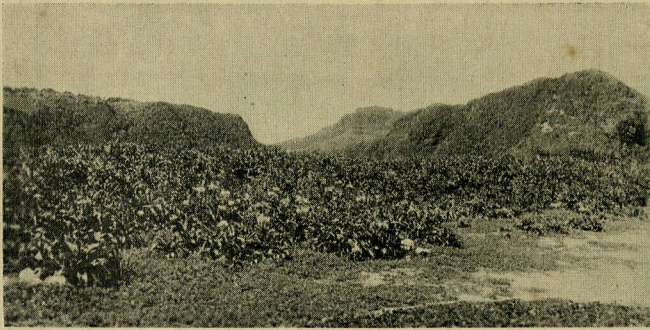
紅樹林 紅樹林は波浪少き海中の泥地に發達し、幹より支柱根を出して支へ、下部より呼吸根を水上に出して呼吸し、また胎生するものである。臺灣では高雄灣・新竹の紅毛・基隆等の海岸にある。高雄灣では高雄川の流域・三塊厝方面及び灣の沿岸諸處に生育して居る。其種類は「あかばなひるぎ」、「たかをこひるぎ」、「おほばひるぎ」、「ひるぎもどき」、「ひるぎだまし」の五種である。「おほばひるぎ」はよく魚溫の縁に植ゑられて居る。又「ひるぎだまし」は可成りの喬木となる。又紅毛のものは河口によく發達して居る。これは今から百四十年ばかり以前に現庄長徐慶旺氏の曾父徐熙拱氏が廣東省惠州府陸豐縣より移植せりとの事で、これは主として「めひるぎ」である。故に臺灣には合計六種の紅

臺灣の植物

第八圖 海濱植物「そてつじゅる」の群叢、恒春半島阿塹衛（原圖）



第九圖 海濱植物「たいわんはまおもと」の小群叢、火燒島海濱（原圖）



樹林の種類があることになる。

海濱植物 海岸の砂地には海濱植物

群落がある。南北によりて多少種

類が異なるが甚しい變化はない。「ぐ

んばいひるがほ」は長き莖莖砂上を

匍匐し、大形の緑葉を着け、美麗な

る紅花を開き、全島海岸に見る。其

他「くさとべら」・「なんばんくさふ

ち」・「きだちはまぐるま」等の草本、

「やまあさ」・「にんじんぼく」・「す

はうぎ」・「くろよな」・「みづがん

び」・「こんろん」・「はすのはぎり」・

「ひめそや」・「しましらき」・「たここ

ん」・「はまぢんちゃう」等がある。

南部に行くと「もんばのき」・「もも

たまな」・「ごばんのあし」等が目につく。

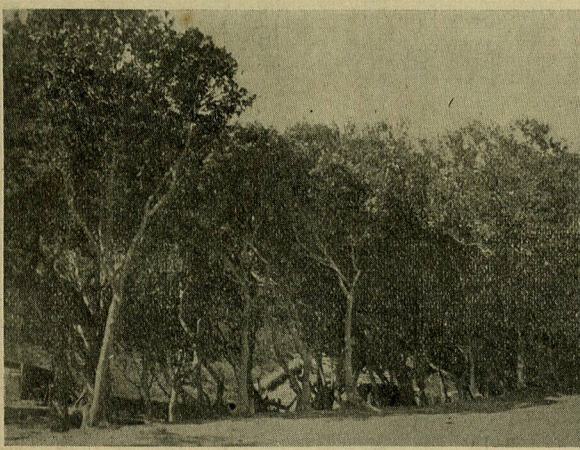
高雄市附近の海岸には「みどりさんご」を見る。これは緑色の丸き莖枝錯

綜し奇異な形態をなして居る。又恒春の船帆石の前の珊瑚石灰石には小さい「はまみづな」が附着して居る。是等海濱植物は臺灣固有のものでなく廣く亞細亞の熱帯及び亞熱帯に分布するもので、海流によりて遠方より齎されたるものが多い。

第十圖 熱帯降雨林、恒春半島墾丁・鸞鑾
〔鼻間 (原圖)〕



第十一圖 熱帯降雨林 (二次的)、「あかてつ」・「おほげつげ」・「ぐみもどき」
其他、恒春半島阿塼衛 (原圖)



熱帯降雨林 典型的な熱帯降雨林は臺灣には少いが、恒春半島の墾丁から鸞鑾鼻崎に行く海岸で見ることが出来る。「おほげあかてつ」・「がらんびいぬびは」・「くろろしぶがき」・「げがき」・「こうしゅんいらのき」・「はすのはぎり」・「おほげつげ」・「てりはぼく」・「くすのしげ」・「たさ

わんちしゃのき・「こうしゅんくさぎ」・「はてるまぎく」・「かなびきぼく」・「ひもかづら」・「とげかづら」・「とうづるもどき」・「くわくわつがゆ」其他の種類が四時生育旺盛で鬱然たる森林をなし、特異の風光を作つて居る。人若し冬季この地方を旅行せば恰も自然の一大温室に入れるが如き思ひをなすであらう。

林・投・林　「りんとう」林は熱帯海岸林で、臺灣では鷺巒鼻附近に其の偉大なる發達を見る。「りんとう」の純群落で其の彎曲せる幹は相互にもつれ合ひ、其葉群は鬱然として樹頂に冠するから、日光が下に通過しない、爲に少數の陰地植物を除いては其他の種類が生育し難い。樹間に懸る紅色の大形な果叢が又一種の趣を添へて居る。單調ではあるが特殊の植物景觀である。

竹・林　本島には美しい竹林がある。其中で最も顯著なのは桂竹林である。「けいちく」は中北部の海拔三〇〇尺より三〇〇尺以下の地に自生するもので、其密林に於ては竹幹林立し、他の樹木の侵入を許さない。其他「まちく」林は海拔四〇〇尺以下の土地に、「かはかむりやだけ」は海拔二〇〇尺から三〇〇尺の個所に、又「まうそうちく」は海拔二〇〇尺以下の地に屢々、美林を形成する。

常・綠・潤・葉・樹・林　三〇〇尺乃至六〇〇尺の間に最も優勢で、種類に富み、中には固有種も少くない。其の主なるものは樟科及び山毛櫸科に屬する常緑の喬木で、これに其他の落葉樹種を交へ、時に少數の針葉樹をも混交して居る。林は鬱着たる原生林で林内は晝尙暗く變化に富み地上には多數の珍らしき草本あり、樹上には着生植物あり、又藤本(蔓)ありて樹枝に懸り、樹上及び地上に寄生植物ありて實に多様である。樟科に屬するものは「くすのき」・「ぎょうしゅう」等の「にくげい」屬、「おほばたぶ」・「にほひたぶ」・「いぬぐす」等の「たぶ」屬、其他「しなくすもどき」・

の「しりぶかがし」屬、「ながばじひ」・「たかさごじひ」・「はりしひのき」等の「しひ」屬、並に「いちゐがし」・「あらかし」・「ながえがし」・「ながばしらかし」等の「かし」屬等は其の主なるものである。これに加ふるに「たい



第十二圖 樹海、主として常緑潤葉樹林、出水坡・浸水營間、海拔約三五〇〇尺（原圖）



第十三圖 常緑潤葉樹林の外圍、出水坡・浸水營間、海拔三〇〇〇尺（原圖）

「こにしくすもどき」・「あかはだぐす」等は其の主なるものである。又山毛櫨に屬するものは主として「くりかし」屬・「しひ」屬・「かし」屬等に屬するもので、「たいわんしひぐり」・「おほくりかし」・「くりかし」・「たいわんくりがし」等の「くり」の如き棘刺ある果實を生ずる「くりかし」類・「おほばがし」・「おにがし」・「あみがし」・「こにしがし」・「こまみがし」等

臺灣の植物

第十四圖 常緑潤葉樹林の内部、喬木は主として山毛櫨及び樟科の種類、出水坡、海拔二六〇〇尺（原圖）



第十五圖 常緑潤葉樹林下の「ひかげへこ」、出水坡、浸水營間、海拔三〇〇〇尺（原圖）



わんつばき・「はりみこばんもち」・「ほるとのき」・「こばんもち」等を交へて

居る。是等は大喬木で枝下高く丁々として天を衝いて

居る。其下には五加科の植物例へば「うらじろたらの

き」・「たいわんやつで」・

「うらじろやつで」・「やど

りふかのき」・「ほざきふか

のき」・「ふかのき」等の外、

「もくたちばな」・「たいみん

たちばな」・「はひのき」屬・

「ひさかき」屬・「ちゃ」屬・

「もくせい」屬等に屬する種類は小喬木として自生し、所謂下木を形成して居る。其他「たいわんやまものがし」・「たいわんせうべんのき」・「せうべんのき」等の珍種も亦其間に混つて居る。又林内には「たいわんばせう」・「くはずいも」